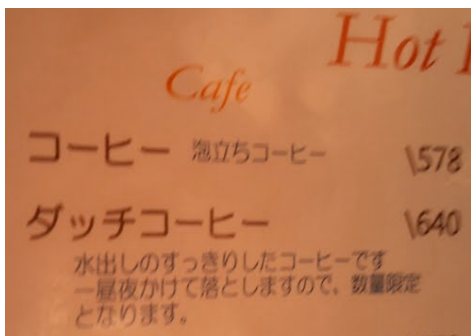


余はいかにして水出しコーヒー信徒になりしか

西川伸一

きょうから毎年恒例の京王百貨店の駅弁大会がはじまる。テレビで見たのがきっかけで、昨年はじめて次女を連れていって見た。開店二〇分前にはデパートの前に着いたものの、すごい行列。開店を待ちかねた客は、開店と同時にまさに脱兎の如く、会場の七階へ駆け上っていく。走らないようにデパート側はアナウンスを繰り返すが、あまり効き目はないようにみえた。

一時間かけて、あちこち並んで目当ての駅弁を人数分買う。満員電車並みの人混みで、「3・11」が二か月早かったらひとたまりもなかった。とつとと帰ろうと階段を降りていくと二階に「ラ・ターブル」という喫茶室があった。疲れたから少し休んでいくか。次女といっしょに入店する。スタバに毛が生えたぐらいのコーヒーが飲めればいいが。メニューをみると「ダッチコーヒー 六四〇円」とある。「水出し」と「数量限定」に釣られて、注文してしまった（写真参照）。



私はけっこうコーヒー好きである。朝と午後の二回飲まないと気が済まない。午後に会議が続くときは、合間に自販機で缶コーヒーを買って飲んでいる。二〇代のころはサイフォンで淹れていた。だが、器具の後片付けが面倒なのでとうにやめてしまった。それからはもっぱらドリップである。

さて、待つこと数分でダッチコーヒーがサーブされた。何の期待もせずに、スマホ片手に一口飲む。えっ、うそー？ すごくいけるのだ。ドリップだと苦味が強く出てしまう。ところが、この水出しコーヒーにはそれがなく味はすこぶるまろやかである。たかが、といたら怒られてしまうが、デパートの喫茶

室でこんなにうまいコーヒーに出会えるとは。

それから一か月して、私は一週間ほど入院した。病院では豆から淹れたコーヒーなど望むべくもない（もっともこのごろは、大きな病院になるとスタバが出店していたりするが）。缶コーヒーでがまんしていた。まともなコーヒーが飲みたい！ 受けていた点滴からインスパイアされたのか、あの京王百貨店で味わった水出しコーヒーの記憶がよみがえってきた。退院のごほうびに水出しコーヒーの器具を買おうと決めるまで、さほど時間はかからなかった。ベッドの上でスマホから値頃な器具を探して注文した。



退院したその日に器具が届いた。四人用でサイズは幅一六・五センチ、奥行一六・五センチ、高さ四七センチである。上のウォーターボールに水を入れて一滴一滴落としていく。中ほどに見える金具がコックで、このレバーで落ちる水の量を調節する。説明書を見ると、一秒に一滴の速度で落としていくといいと書いてある。これを鍋に移し替えて温めて飲む。

朝食時に楽しもうと夜寝る前にしかける。翌朝起きてうきうきしながら飲んでみる。違う！ 確かに苦みはない。しかし、あのときの味とはかけ離れている。薄いのだ。コーヒーとして物足りない。粉が少ないのか、挽き方が粗いのか。その日、もう一度午後にトライするが結果は同じだった。

二か月ぐらい試行錯誤して、原因は落とす速度が速すぎて抽出が不十分だったことによく気づく。一秒に一滴では、少なくとも私好みの味にはならない。反対にゆっくりすぎると、抽出しすぎてコーヒーの油が浮いてしまい、味をこわしてしまう。あるいは、できたコーヒーをうっかり二日も放っておくと、薄く変色してとても飲めなくなる。コーヒーは生きているのだ。無理して味を

もたせている缶コーヒーがまずいのも道理である。

私が好きな味にするには、だいたい七秒に一滴くらいが望ましいことがわかってきた。ただ、レバーの調整がむずかしい。絞りすぎると翌朝には間に合わないし、ちょっとでも緩めると濃くのない代物になってしまう。寝る前に落ち具合を必ずチェックする。それでも、翌朝思いどおりの味にはなかなか仕上がらない。

当然、水の落ちる速度はウォーターボールに残っている水の量に反比例する。だから、就寝前にいい具合に落ちていると思っていても、朝起きるとウォーターボールに水がまだ残っていることがよくある。そうになると、徒労感で少しへこんでしまう。逆に、午前中私がやたらに機嫌のいいときは、水出しコーヒーの「行」に成功したときだ。

水出しコーヒー信徒になって一年が経とうとしている。いまでは、落ちきったコーヒーを受けるガラスボトルから温め用の鍋に移すときに、色をみてその朝のできばえがわかるようになった。とはいえ、まだまだ修行の身である。満足いく味を出せる率はイチローの打率より低いかもしれない。そういえば、イチローは「小さなことを積み重ねることが、とんでもない所に辿りつくただ一つの道」と語っている。二〇〇八年七月二九日に日米通算三〇〇〇本安打を達成したときのせりふだ。その求道者意識にしばれる。

コーヒーの淹れ方一つとっても、まさにしかりである。毎朝おいしいコーヒーを味わうために、宗教的な「行」にも似た気持ちで一滴の速度調節をおろそかにしない。そして、毎日を朗らかに始めたい。

二〇一二年一月一三日

追記・一月一五日にまた次女を連れて駅弁大会にいき、帰りにお礼参りとばかりに「ラ・ターブル」を再訪した。すばらしい色合い、濃くとまろやかさの絶妙のバランス。私の淹れたものとは格段の差だ。まだまだ修行を積まなければとうなった。キッチンを見ると、水出しコーヒーの大きな器具があった。